

もその流の一人であると思ふ。私が岩村さんから今度エッチングをやる人が来たと聞いたのは、たしか四十二年の六月初旬であつたが、同時に森田君からも、その人は先に來て居た畫家のベレスノウドなどは全く異つた人であると聞き、一度面會して見たと思ふて、紹介を乞ひまして、森田君に所を教へられて、下谷金杉の氏が最初の寓居を訪ひましたのは、六月中頃であつた。門も玄關もなく、往來から直ちに入口のある家で、丁度その入口も明家のやうに閉されてありましたのを明けて案内を乞ふた時、出て來たのはリーチ氏でした、一見舊知の如き、實に美術家氣質の人で、すぐに私を南面の小室に導き、自作のエッチング二十餘枚を示し、亦精細にその製版法から、種類や、用紙や、インキのことまで説明し、後に本國より持ち來りて組立た計の大なる印刷機を運轉して、一二枚摺て見せてくれ、それから老婢に命じて罐詰様のものでお茶の御馳走になり、とう／＼夕刻近くまで話して、翌日は私の家へ來る事を約して歸りましたが、その時、私は何故にこんな場末の町

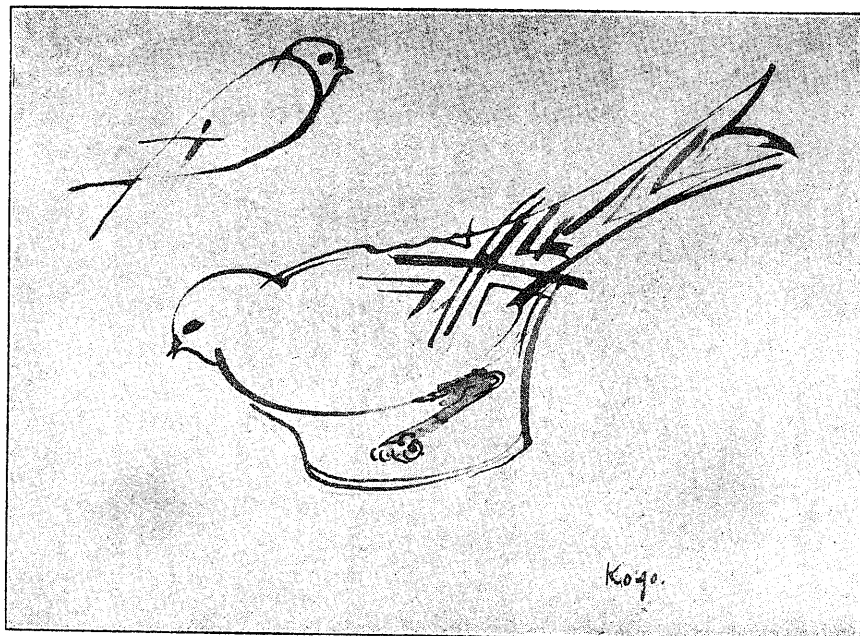


影近氏チーリ・ドアナアバ

屋の如き家に、簀垂一枚を隔て隣家の臺所まで見通すやうな所に住居を定めたものか、又風俗習慣も異り、話も通せぬ人の、よくも一人で住たものだと思ひました、尤も當時森田君の家は近い近所であつたのです。これは全く氏が日本趣味を最下層より觀察するつもりであつたらうと後に思ひ當りました。其後暫くして上野櫻木町に借地して凡て自身の考案に成た、小じんまりした日本家屋を作り、國より妻君を迎へて、昨年末まで住居られたが、此五年の間には、段々と交友も廣くなり、知名の人とも往來するやうになり、支那畫を多く藏して居る寺崎氏や、古器物採集家の黒田氏の如きもあつて、それ等多くの知人を通して、氏の日本趣味は益々洗練し、又その東洋繪畫に對する見識も、普通の畫家以上に進み、そうして、思想上の問題には、舊日本より、新日本に、時代の推移と共に、我精神界の共有遺産とも云ふべき神佛敎より、孔子の敎が、今猶ほ我々に影響する所に、現代の高襟宗と衝突する現象にも注意するやうになり、今年の初夏、途上で面會した時には、

今支那の本を讀で居るから、やがて問ひたいことが出來たと、云はれたのには頗る面喰つたこともある。しかし此時は私の言葉の力はこれ等の問題を遺憾なく説明するに足らぬ點に閉口した計りで、氏の疑問は如何なる程度にまで進んで居たかはわからなかつたのであつた。
人の一生に於ける五年は決して短かい

小鳥香合圖案



パアナアド・リーチ筆

時間ではない、氏は此間に於て、各種のエッチングを作り、繪もかき、陶器も作り初めたのである、それ等の作品數十點は先日三笠と田中兩美術店に於て、氏が日本に於ける最終の展覽會として公衆に示されたが、其中陶器は主なるものであつて、如何にも東洋趣味をよく咀嚼了解した作品で、氏が研究の凡ならざるを認むるに足る物が多くあつた。氏は又同時に「回顧」と題する小冊を出版して此展覽會に出品した作品の外に、言語によつての

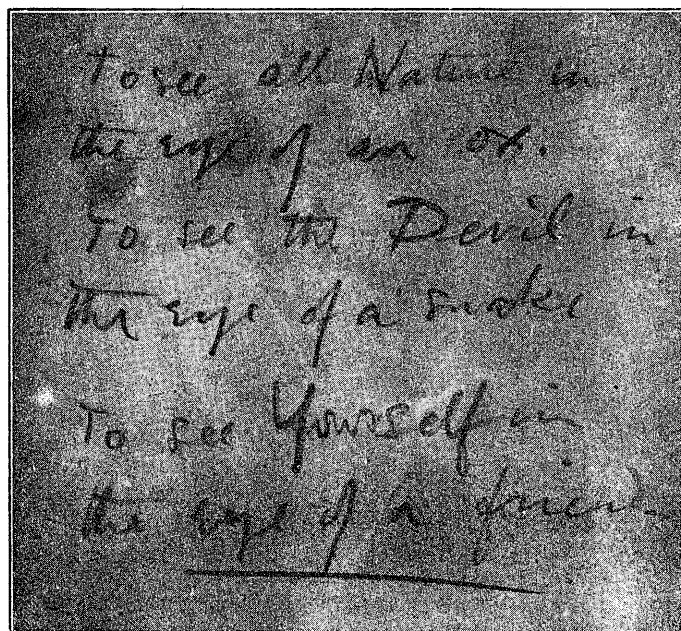
み表出し得る、一束の思想を聚集して、之を文學的追補として居る。氏は如何なる思想を以て製作する人であるかを知りたく思ふ人は一讀すべきものであらう。

私はリーチ氏が如何なる動機から製陶に傾むいたものか、一向に聞き及ばなかつたが、櫻木町の家の庭の一隅には、竈と轆轤場があつて、乾山氏を迎へて、樂焼を學び、その後横濱に通ひて、香山氏に就き本焼を學んだことは知つて居る。然しそれは製陶の技巧だけの方面で、形や紋様に至つては、全然自身に研究自得したものである。此間の展覽會には、陶器用の紋様の習作も多くあつたが、なか／＼面白い方面に着眼して居られることは認められた。その中の一は葡萄の紋様であつたが、筆觸も面白く墨色は守景の繪に見るが如き銀灰色の澁味があつて、とても普通の外國人には出來そうもないものであつた。樂焼の方では富本氏と殆んど同時に一新時期を作つたものと私は信ずる。今は確かな記憶はないが、去年の十一月末に突然私を訪はれたが、その時の用は、何か繪の話をするに就て、私の集めて居る小供の繪を少々借してくれとのことであつた、又その時此頃北京に居る何とか云ふ未知の人より、電報で會見を求めて來たが、その電文は、我より行かうか、君が來るかとしてあつたとのこと、其人はリーチ氏の書たものを讀みて、かく申込だものらしいが、氏も亦其人の書た論文を讀んで、是非面會したいと云ふて居られたが、それが今度の支那行きと成たの

であらう。氏にとりて此行の有益なるは云ふまでもなからう。さてつまらぬ事をなが／＼と述べたが、要するにリーチ君の日本滞在間は、氏にとりては修養の時代であつたので、今後その本國に於ける發展こそ、大に期待すべきものであらうと私は信ずる。(十一月十三日初夜)

リーチ氏筆蹟

長原氏のスケッチブックに記されたる散歩中の感想



バナナアド・リーチ氏は明年二月を以て日本を去らんとして居る。氏が在留六年間に、如何に深く日本及支那の藝術を咀嚼したかは驚嘆を償する。茲に氏の最敬服しつゝある諸氏の感想を請ふて之を掲げたのは、聊か氏が我日本の藝術に向て拂つた敬意に報おんと欲してある。微意を賛成して寄稿せられた諸氏に感謝する。宮本君の旅行中寄稿を得なかつたのは、大に遺憾とするところである。(犀水)

リーチ 柳 泉 虎

雨が降つて道が悪い或晩自分は兒島や里見と一緒に上野の山をぬけて櫻木町へ出た。もう五年前になる。その晩リーチの處でエッチングの話がある爲に十五六人の人がそのアテリエに集つてゐた。自分がその若い純英吉利の人を見たのは其時が始めてだつた。リーチはエッチングの歴史から話し出した。黒板に書いた名は第一に Rembrandt だつた。次に Goya だつた。それから Meryon Whistler, John 等を挙げた。そうして最後に「現代最大のエッチャーは John だ」と云つた。自分につて此新らしい名をリーチは力を込めて云つた。そうして此藝術家の事を云ふ時リーチは最も熱してゐた。リーチはその晩何遍デューン々々と云つたかしのれない。當時デューンの名も又その作品も知らなかつた自分には寧ろ奇妙にさへ思つた。リーチは宛らそれが確説である様に絶対のオーソリティーを含めて「今吾々の間に生きてゐる最大の藝術家はデューンだ」と云つた。

デューンの名が日本人の耳に入つたのも恐らく其時が始めてだつたらう。その晩は又日本に始めてエッチングの方法が傳つた時だ。

人はその崇拜するものゝ裡に自己の姿を映じてゐる。デューンのデッサンを一枚見ればリーチの作品が何を求めてゐるかを今想像する事が出來よう